

## 第 章 世界の農産物貿易構造の変化



# 1 我が国の農産物輸入等の動向

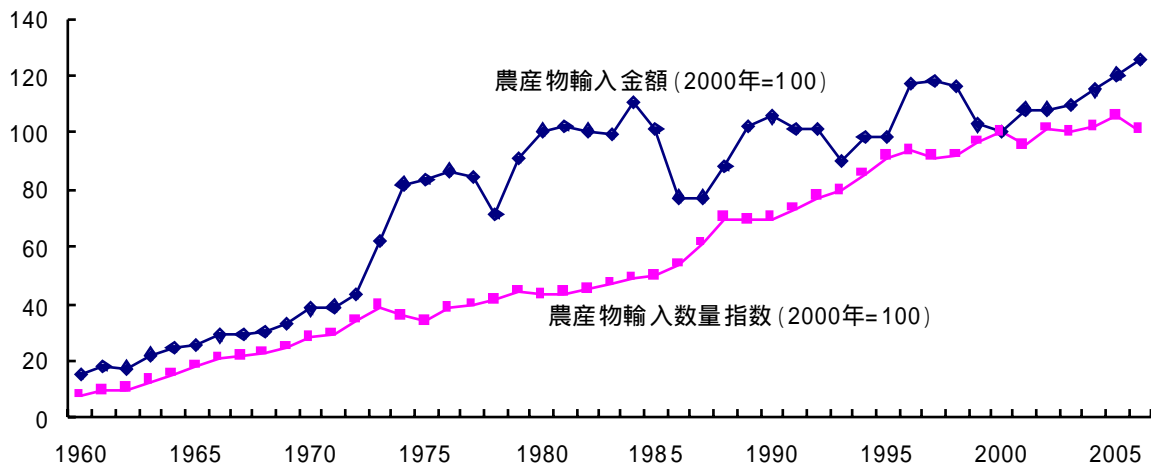
## (1) 概観

(海外依存を高めた我が国の食料供給)

我が国の農産物輸入は、1960～2006年の間、金額ベースで8.0倍、数量ベースで12.6倍と大幅に増加している。

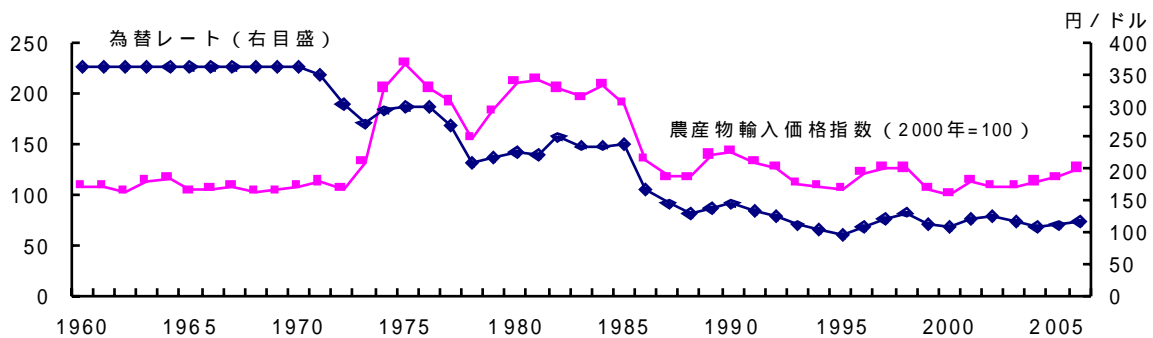
多様な食生活が実現されるなか、需要が拡大した畜産物や油脂類の生産に必要な飼料穀物や大豆等の油糧種子のほとんどは国土条件等の制約から輸入に依存せざるを得ない状況にある。また、近年では、食の外部化・サービス化などの食料消費構造の変化や経済のグローバル化といった社会経済情勢の変化のなかで、我が国の農業生産が消費者や実需者のニーズに品質・価格等の面で必ずしも十分に対応できておらず、このことから、結果として実需者が原材料を海外から調達している面もある。

図2-1 我が国の農産物の輸入金額及び輸入数量の推移



資料：財務省「貿易統計」、農林水産省「農林水産物輸出入の数量・価格指数」及び「農林水産物輸出入概況」  
注：農産物輸入数量指数の2000年以前は、1995年=100の数値を基に2000年=100の指数を試算した。

## (参考) 農産物の輸入価格指数及び為替レートの推移



資料：財務省「貿易統計」、農林水産省「農林水産物輸出入の数量・価格指数」及び「農林水産物輸出入概況」  
注1：農産物輸入数量指数の2000年以前は、1995年=100の数値を基に2000年=100の指数を試算した。

注2：為替レートは、東京市場「インターバンク直物中心相場」の各月中平均値。(70年までは360円/ドル。)

(我が国食料輸入の質的变化)

消費者ニーズの多様化・高度化、国土条件の制約等を背景に、我が国の食料輸入は、大きく拡大するとともに、輸入される品目も大きく変化している。

60年当時には国民の主要食料を確保する必要性から、直接食用として消費する小麦の輸入額が最も多かった。(表2-1)

その後、国民所得の増大に伴い食生活の多様化・高度化が進展し、畜産物や油脂類の国内需要が拡大したこと等から、80年代には、家畜の飼料のとうもろこしや、植物性油脂原料の大豆の輸入が拡大した。90年以降は、食肉の需要が国内生産を上回って増加したことから、牛肉、豚肉等畜産物の輸入が拡大し、また、近年、生鮮野菜、冷凍野菜、生鮮・乾燥果実についても、消費の周年化や業務用・加工用需要の増大等により、輸入が増加傾向で推移している。

表2-1 我が国の輸入農産物の上位10品目の推移(金額ベース)

	1960年	1970	1980	1990	2000	2006
1位	小麦	とうもろこし	とうもろこし	とうもろこし	豚肉	たばこ
2位	大豆	大豆	大豆	牛肉	たばこ	豚肉
3位	粗糖	小麦	小麦	アルコール飲料	牛肉	とうもろこし
4位	とうもろこし	粗糖	粗糖	豚肉	生鮮・乾燥果実	生鮮・乾燥果実
5位	牛脂	グリーンソルガム	コーヒー豆	たばこ	とうもろこし	牛肉
6位	米	バナナ	グリーンソルガム	大豆	アルコール飲料	アルコール飲料
7位	コブラ	たばこ	牛肉	小麦	大豆	大豆
8位	乾燥ミルク(脱脂)	コーヒー豆	豚肉	菜種	小麦	小麦
9位	たばこ	牛脂	たばこ	鶏肉	生鮮野菜	鶏肉調製品
10位	ふすま	羊肉	アルコール飲料	コーヒー豆	鶏肉	冷凍野菜

資料：財務省「貿易統計」

注：1) 工業用原料(羊毛、綿、天然ゴム、その他(牛皮等))を除く。

2) たばこは、製品たばこを含む。

3) 1990年以前は、生鮮・乾燥果実の分類を採用していない。

(2) 輸入動向と輸出動向

(我が国は世界第1位の農産物純輸入国)

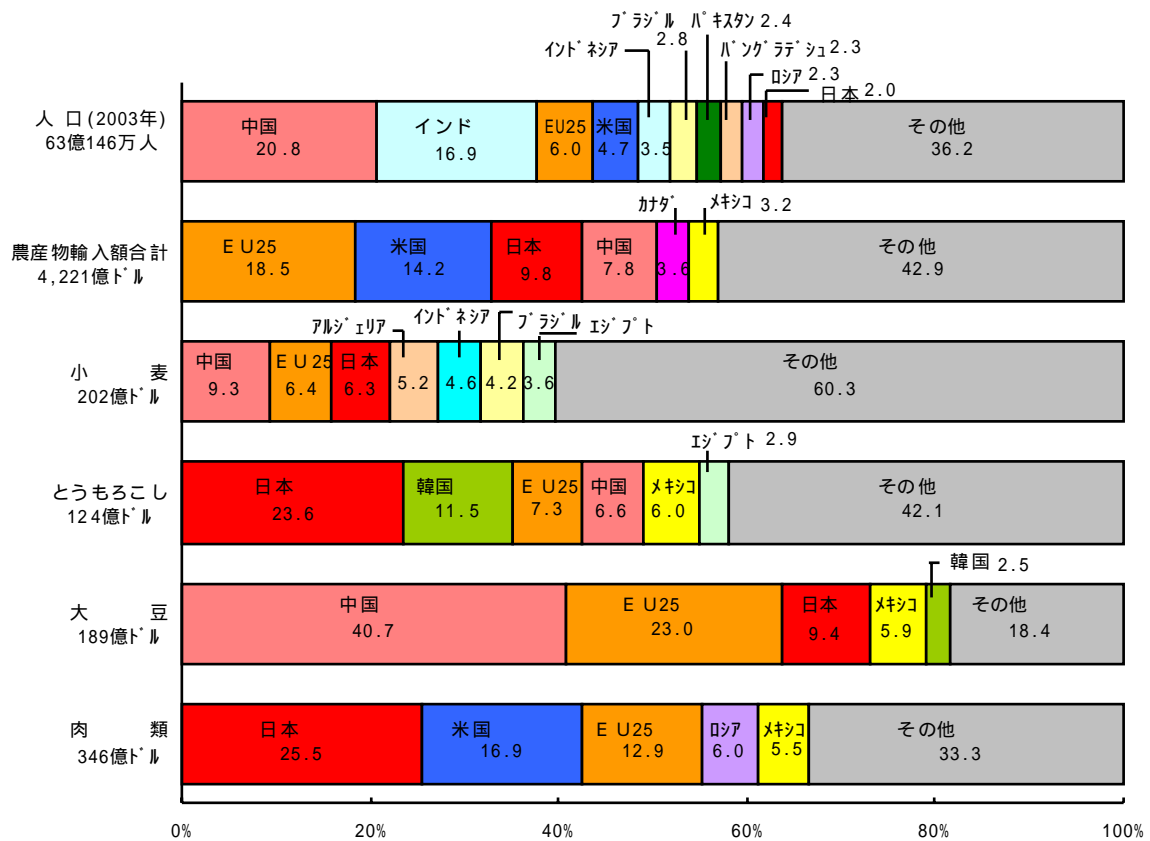
様々な要因を背景に農産物の輸入が増大し、世界の農産物輸入に占める我が国のシェアは高まっている。世界の人口に占める我が国のシェアは、2004年で2.0%にすぎないものの、世界の農産物輸入に占めるシェア(金額ベース)は、その約5倍の9.8%を占め、世界第3位となっている。代表的な品目でみると、とうもろこし、肉類がそれぞれ、23.6%、25.5%と世界第1位となっており、小麦(6.3%)、大豆(9.4%)はそれぞれ、中国、EU

25 に次ぎ第 3 位となっている。(図 2-2)

F A O (国連食糧農業機関) の資料を用いて、国別の農産物の輸出入バランスをみると、我が国の農産物純輸入額(輸入額 - 輸出額)は、拡大傾向で推移している。その結果、我が国は、1984 年以降、世界第 1 位の農産物純輸入国となっている。米国や E U 25、カナダでは輸入額とともに輸出額も多いが、我が国は圧倒的に輸入に偏っており、他の国とは異なる構造となっている。

なお、近年では、世界的な日本食ブームやアジア諸国の経済発展による高所得者層の増加等により、高品質で安全・安心な我が国の農林水産物・食品の輸出拡大の可能性が増大していることから、民と官が一体となった輸出促進への取組が進められている。

図 2-2 我が国の世界人口及び世界農産物輸入額に占める割合(2004 年)



資料：FAO「FAOSTAT」

注1：EU25は、域内流通を除いたものであり、合計からも除いている。

2：中国の人口には、台湾・香港・マカオを含み、農産物輸入額には、台湾を含み、香港・マカオを除く。

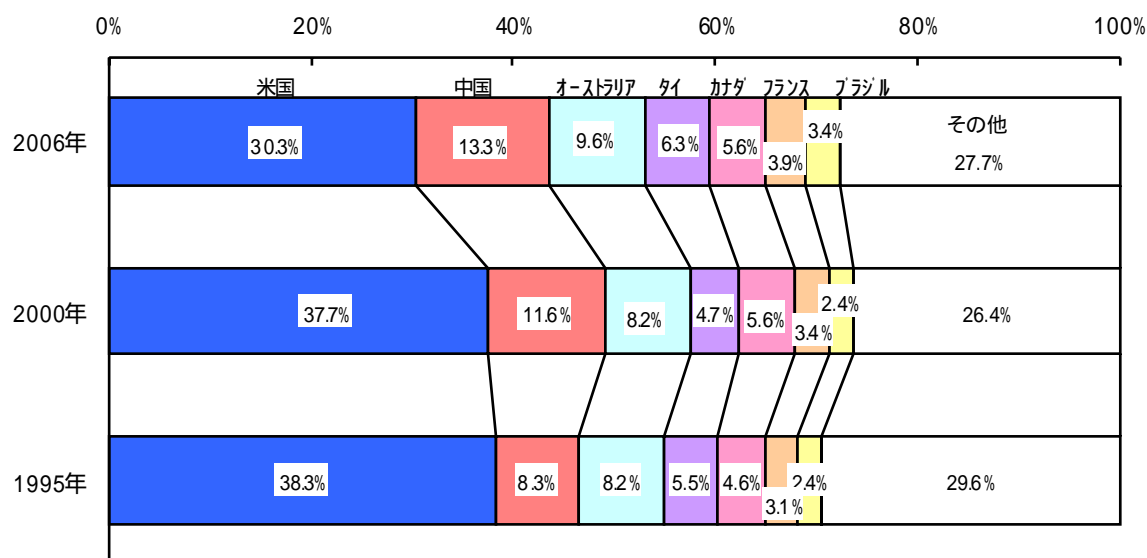
(米国など特定国への依存度が高い我が国の農産物輸入)

国土条件に制約のある我が国では、消費者ニーズの高度化・多様化等を背景に農産物輸入が大きく増加してきた。2006年の我が国の農産物輸入先国をみると、米国が30.3%と第一位を占め、次に、中国(13.3%)、オーストラリア(9.6%)、タイ(6.3%)、カナダ(5.6%)となっており、この上位5か国で農産物輸入額の6割強を占めている。

1995年からの我が国の農産物輸入先国の変化をみると、米国のシェアが減少する一方で中国のシェアが増加しており、1995年の8.3%から2006年には13.3%と増加している。

(図2-3)

図2-3 我が国の輸入先国別農産物輸入額の推移



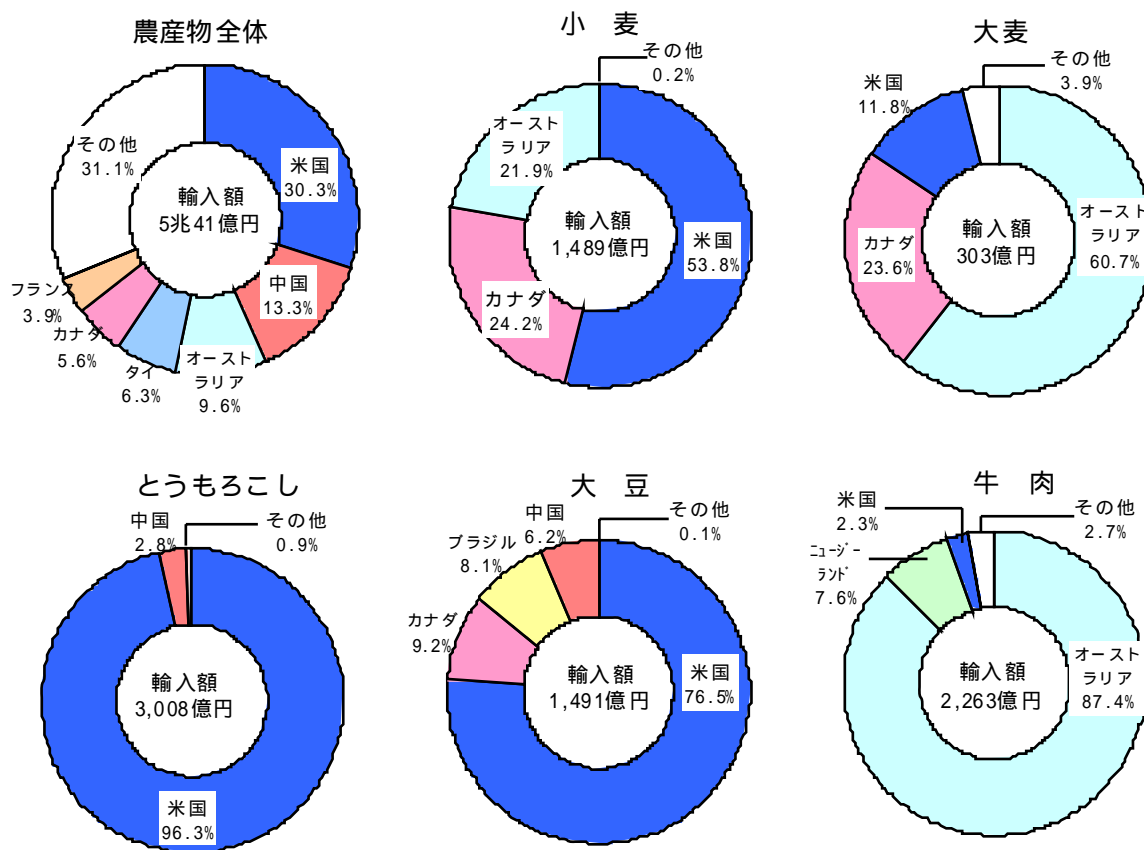
資料: 財務省「貿易統計」

我が国への供給の多くを海外からの輸入に依存している主要農産物別に輸入先国をみると、とうもろこしや大豆等輸入金額の多い農産物は特定国への依存傾向が顕著であり、上位2か国で約8~9割を占めている。特に、米国のシェアはいずれも高く、中でもとうもろこし、大豆は、それぞれ96.3%、76.5%と圧倒的なシェアを占めている。(図2-4)

このように、我が国の農産物の輸入構造は、米国をはじめとした少数の特定の国・地域への依存度が高いという特徴を有し、特に、多くの国・地域で消費され、世界的に需要の増加が見込まれる飼料穀物や油糧種子ではその傾向が強くなっている。

このため、輸入に多くを依存している我が国の食料供給は、国際需給の変動や輸入先国の輸出政策の影響を受けやすい状況となっているため、出来るだけ輸入先の多角化等を図り、リスク分散に努めることが重要である。

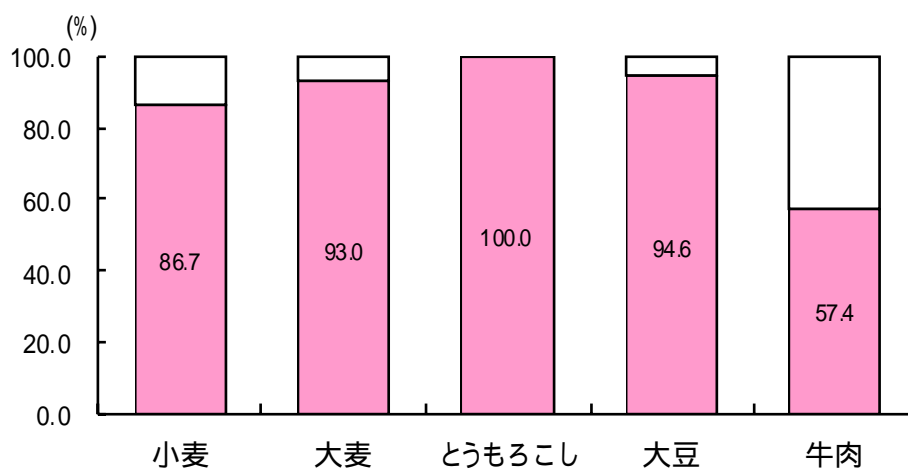
図 2-4 我が国の主要農産物の国別輸入割合（2006 年）



資料：財務省「貿易統計」

注：大麦には裸麦を含む。

(参考) 主要品目別の我が国の供給量に占める輸入量の割合 (2006 年度)



資料：農林水産省「食料需給表」

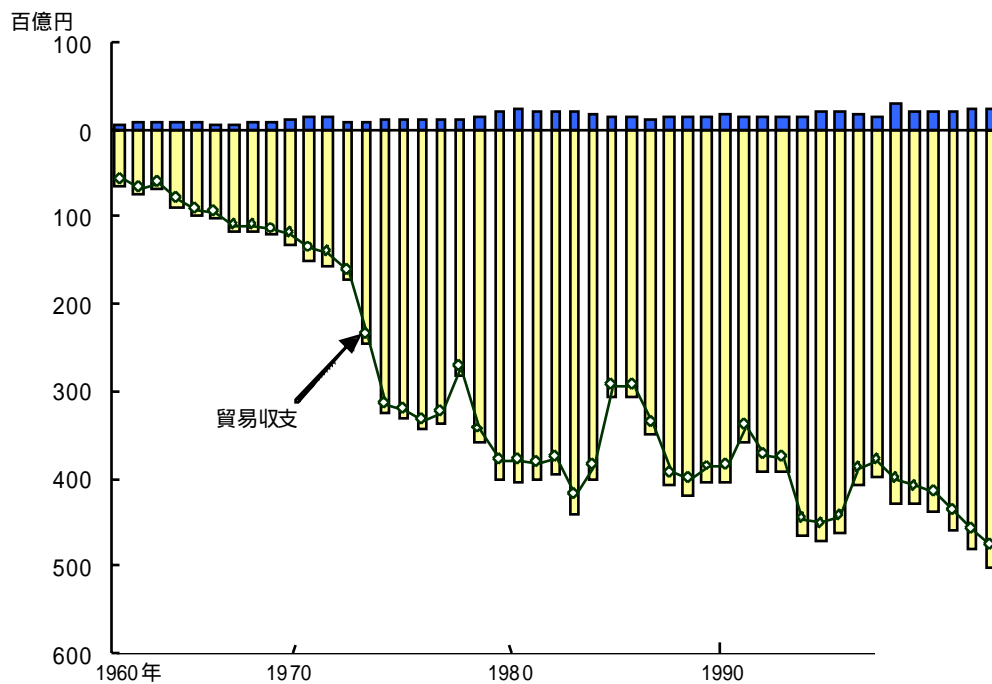
注：供給量は、国内生産量と輸入量の合計である。

(我が国の農産物貿易収支は大幅な赤字となっている)

一般に、我が国の国土条件の制約等を背景とした経営規模の零細性等に起因するコスト高のため国際競争力が弱いこと等から、2006年の輸出額は、輸入額が5.0兆円であるのに対し、約2,400億円となっている。この結果、農産物の貿易収支は、恒常的に大幅な赤字となっており、その額は1960年の5,600億円から2006年には約4.8兆円と拡大している。

(図2-5)

図2-5 我が国の農産物貿易動向(円ベース)



資料：財務省「貿易統計」

注1) 金額は、輸出がFOB価格、輸入がCIF価格である。

2) 羊毛、アルコール飲料、たばこ、天然ゴム及び綿を含む。

3) 貿易収支 = 輸出額 - 輸入額

## 2 農産物貿易をめぐる近年の動向

### (1) 世界の穀物貿易の動向

世界の穀物貿易量の推移をみると、1980年代はアジアを中心とした開発途上国の輸入が増加したことを背景に、世界全体の輸入量は増加傾向で推移した。90年代に入り、ロシアや東欧では国内経済の混乱に伴い輸入量が大きく減少したこと等から、世界全体の輸入量は、ほぼ横ばいで推移したが、近年ではアフリカ、アジアを中心に輸入量は、拡大傾向となっている。また、このような動きを輸出国側からみると、近年では、米国、カナダ等で輸出量の伸びに鈍化がみられる一方で、南米の輸出量が拡大している。(図2-6)

地域別構成シェアの変化をやや長期的にみるため、1988/89～90/91年度平均と2004/05～06/07年度平均を比較すると、輸入では、ロシア、中国のシェアが低下する一方、アフリカ、アジア、南米のシェアが高まった。(表2-2)

輸出では、過剰在庫削減のために生産調整による供給管理が行われたことや加盟国の拡大等からEU(域内流通を除く。以下同じ。)のシェアは16.8%から7.8%へと低下した。米国は、世界の穀物輸出に占めるシェアが45.3%から34.8%へと低下している。一方、南米は4.6%から13.7%へシェアを上昇させている。

表2-2 穀物貿易の動向 (穀物輸出入量の国・地域別シェアの変化)

単位：%

	輸 入				輸 出		
	1988/89～ 90/91平均	2004/05～ 06/07平均	ポイント差		1988/89～ 90/91平均	2004/05～ 06/07平均	ポイント差
南米	4.3	9.3	5.0	米国	45.3	34.8	10.5
ロシア	11.2	0.8	10.4	カナダ	10.1	8.2	2.0
アフリカ	13.1	21.4	8.3	南米	4.6	13.7	9.1
アジア	14.5	20.0	5.5	EU	16.8	7.8	9.0
中国	6.6	2.1	4.4	オセアニア	6.7	7.0	0.3
日本	13.0	10.7	2.3	アジア	4.7	10.0	5.2
その他	37.4	35.7	1.7	中国	2.7	3.4	0.7
				その他	9.1	15.2	6.1

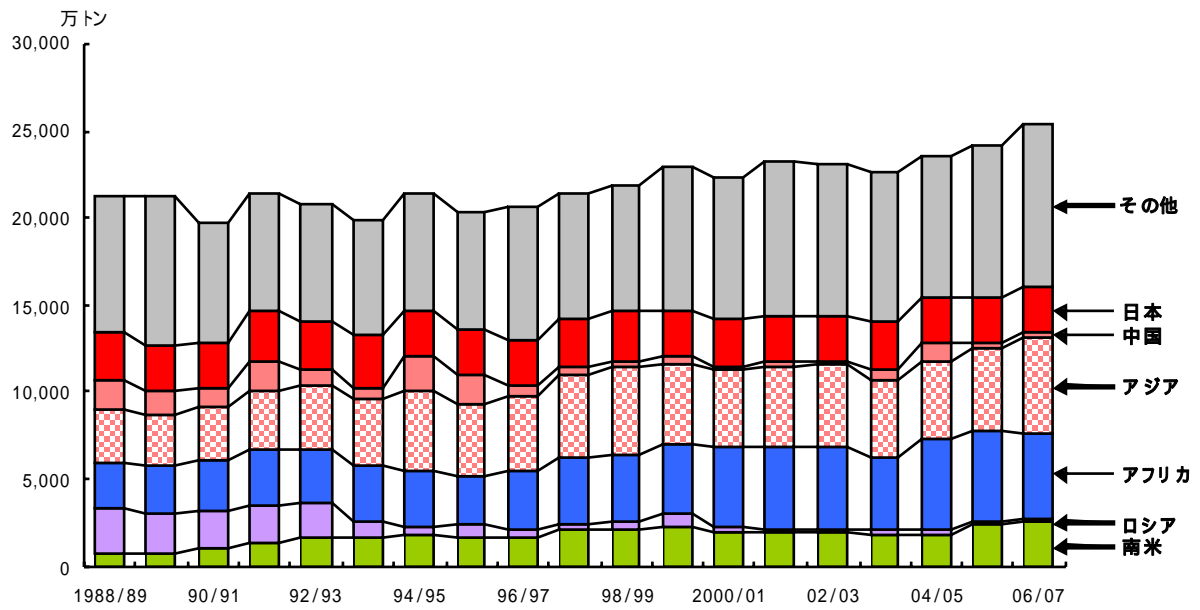
資料：USDA「PS&D(2008.01)」

注1) EUの域内流通を除いた数値である。

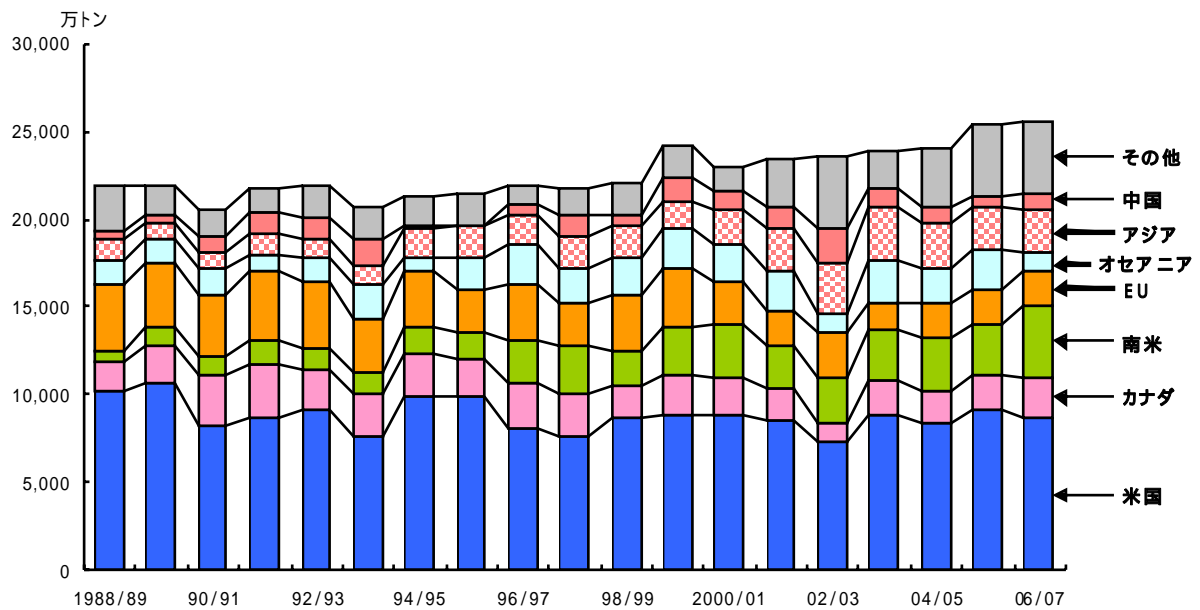
2) アジアは、中国、日本及び中央アジア諸国(カザフスタン、ウズベキスタン等)を除く数値である。

図 2-6 穀物貿易の動向（国・地域別穀物輸出入量の推移）

（輸入量）



（輸出量）



資料：USDA「PS&D(2008.01)」

注1) EUの域内流通を除いた数値である。

2) アジアは、中国、日本及び中央アジア諸国（カザフスタン、ウズベキスタン等）を除く数値である。

## (2) 地域別農産物貿易の動向

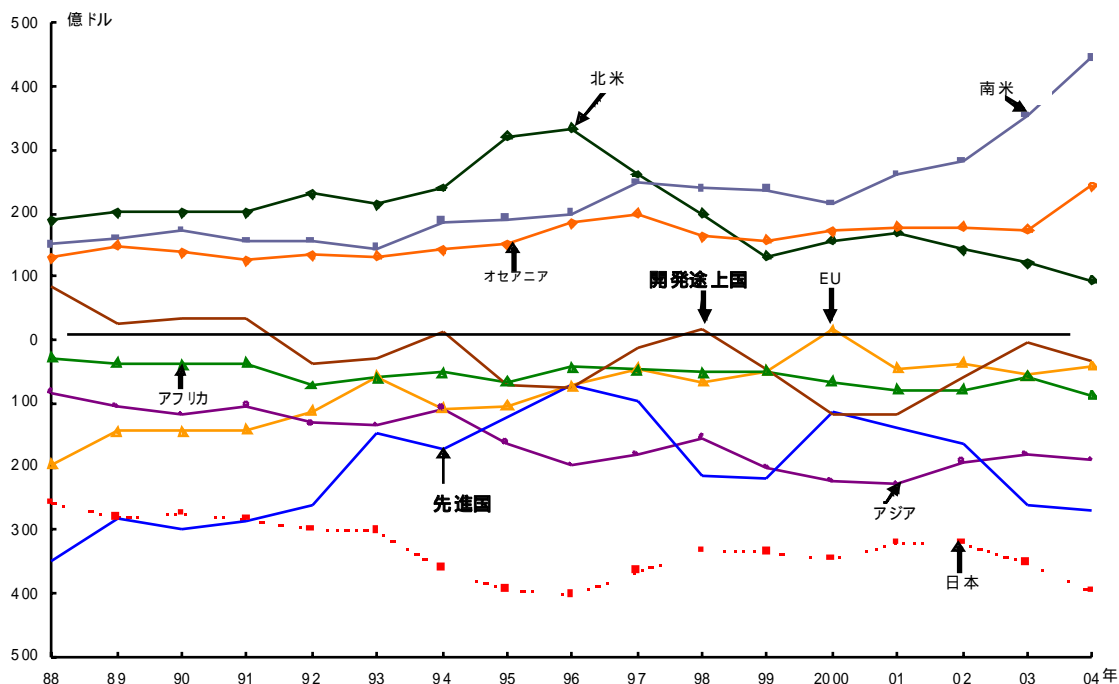
地域別の農産物の貿易収支（輸出額 - 輸入額）の動向をみると、北米、オセアニア、南米の輸出地域と日本をはじめとしたアジア等の輸入依存地域の2極分化が鮮明になっている。

北米では、農産物輸出額が輸入額を上回って推移しているが、輸出超過額（黒字）はアジア地域への輸出拡大等に伴い、96年に335億ドルとなったものの97年以降はアジア諸国の経済危機の影響や国際価格の低迷等で減少し、2004年には94億ドルとなっている。また、南米は、北米、オセアニアとともに輸出超過で推移しており、98年以降世界最大の輸出地域となっている。

一方、アジアや日本ではそれぞれ輸入超過額（赤字）は、88年～2004年間に83億ドルから190億ドル、258億ドルから396億ドルとなり輸入依存を高めている。中国は、90年代半ばまでは輸出超過であったが、95年以降は輸入超過で推移している。

このように、アジアやアフリカにおいては、人口増加や経済成長に伴う消費者ニーズの高度化・多様化等を背景に需要が増加したものの、国内生産が需要増に追いつかず、南米、北米、オセアニアからの輸入で補うという傾向が定着しつつある。アジアやアフリカ等の開発途上国では、今後とも所得水準の上昇に従って農産物需要が増大すると見込まれることから、近年、世界の農産物輸出の中でますます比重を高めている南米諸国の動向にも注視する必要がある。（図2-7）

図2-7 地域別農産物貿易収支額の推移



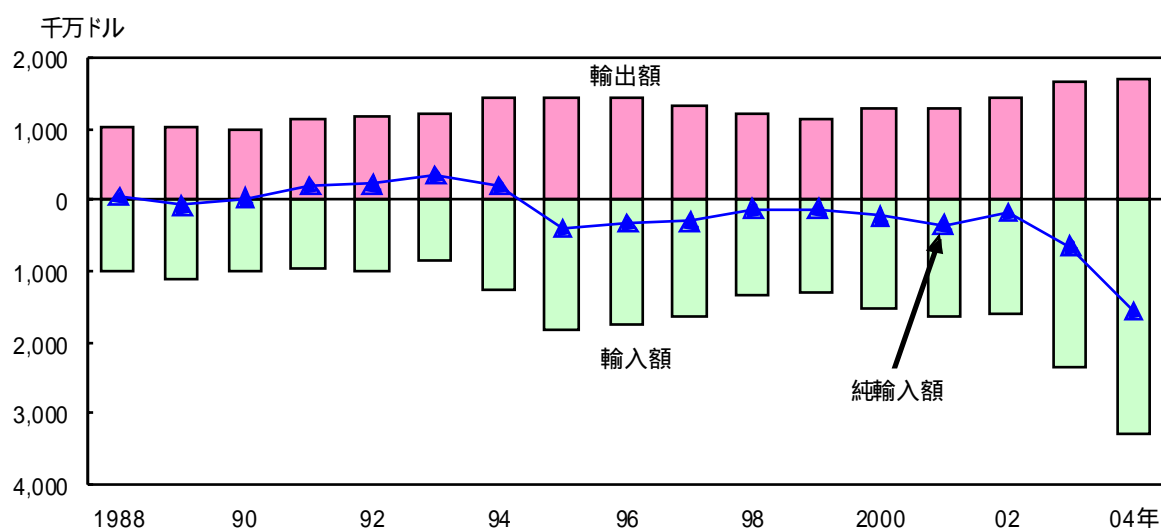
資料：FAO「FAOSTAT」

注1) 貿易収支額 = 輸出額 (FOBベース) - 輸入額 (CIFベース)

2) EUは、域内流通を除いた数値である。

3) アジアは、中国、日本及び中央アジア諸国 (カザフスタン、ウズベキスタン等) を除く数値である。

(参考) 中国の農産物収支額の推移



資料：FAO「FAOSTAT」

注：中国には、台湾を含み、香港・マカオを除く。

(3) 東・東南アジア及び中国の農産物輸入動向

輸入額の伸びが大きい東・東南アジア（中国及び日本を除く。以下同じ。）について、主要農産物別にみた輸入額の動向をみると、穀物、肉類、大豆、乳製品だけでなく、飲料等でも伸びがみられ、経済成長に伴い肉類や油脂類の消費が拡大しただけでなく、消費者ニーズに対応して農産物輸入の多様化が進展していることがわかる。（図 2-8）

また、主要な輸入品目であるとうもろこし、大豆について、国内需要量、国内生産量、輸入量の推移をみると、国内需要量が大きく増加する一方で、国内生産量がほぼ横ばいで推移したため、需要増に対応して輸入量が増大したことがうかがえる。なお、2000 年以降はとうもろこしでは国内生産量が増加傾向で推移し、大豆は国内需要量が横ばいとなったことから、輸入量はともに横ばいで推移している。（図 2-9）

このように東・東南アジア地域で農産物の需要が増大した背景には、この地域における経済発展に伴う人口の増加があり、都市部の人口比率も増加してきている。また、国民 1 人・1 日当たり供給熱量の推移をみると、86 年において約 2,400kcal であったものが 95 年には約 2,700kcal まで増加しており、96 年以降、アジア経済危機の影響による一時的な農産物需要の落ち込みがみられるものの、人口増加、食生活の変化の両要因による食料需要の増加が今後とも見込まれる。

また、中国においては、沿岸部を中心に食生活の高度化が進行し、また、WTO 加盟に伴い主要穀物等が関税割当制へ移行したこと、さらに経済成長が内陸部へも波及する可能性があることから、今後、中国国内の需給動向によっては、穀物輸入が増える可能性がある。

この場合、世界の主要穀物等の市場にも影響を与えることが考えられることから、今後とも中国の消費動向や輸入動向を注視していく必要がある。

図2-8 東・東南アジアの主要農産物別輸入額

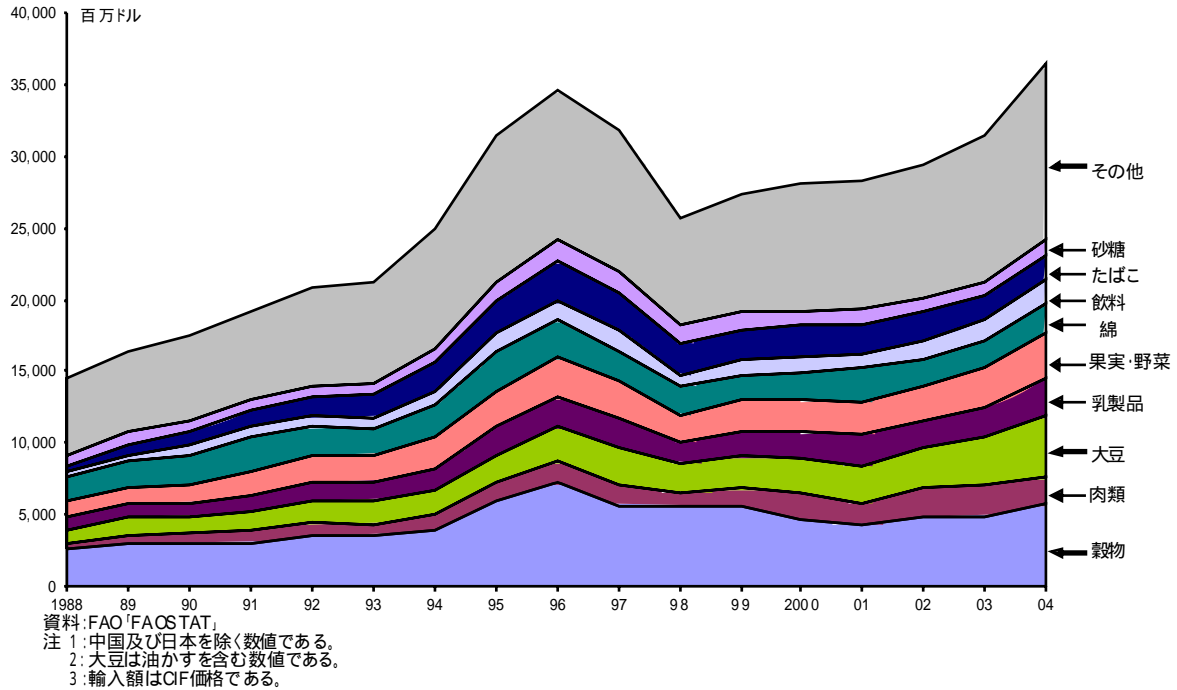
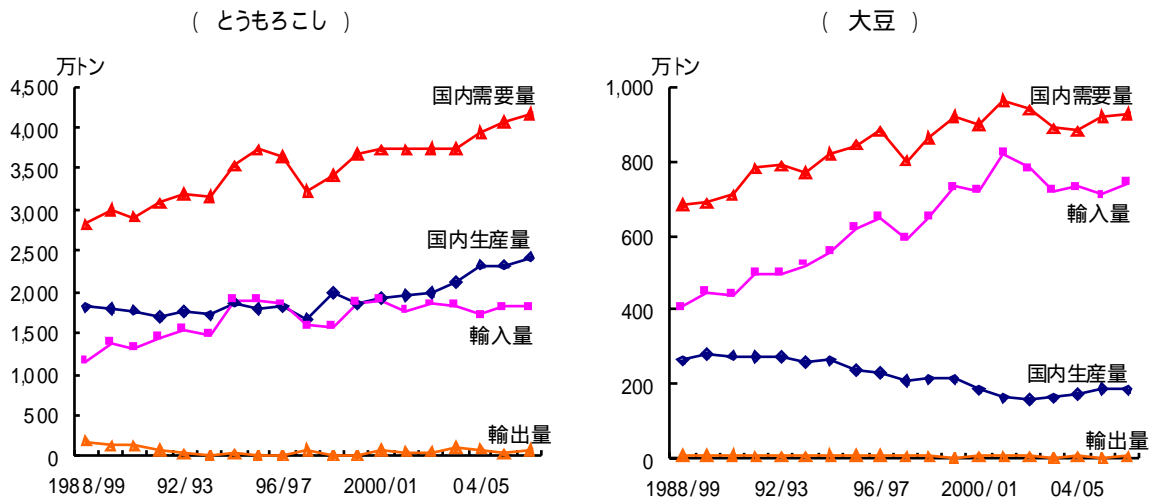


図2-9 東・東南アジアにおけるとうもろこし・大豆の生産量、輸入量等の推移



資料：USDA「PS&D(2008.01)」  
 注：中国及び日本を除く数値である。

